

編集後記

- 75周年記念事業も、その締め括りである記念式典・祝賀会をもって成功裡に幕を下ろした。ここに至る5年余を費やした準備と周到な計画推進を思う時、21回に及ぶ会議を重ねた実行委員会委員の努力を多とするとともに、これを指揮し、纏め上げた新庄博志委員長、松岡慎治事務局長の手腕に敬意を表し、感謝する外ない。そして、これらの献身に呼応して物心両面で支えた翔友各位の存在無しには、この事業の完結は有り得なかった。全翔友を代表して心からの御礼を申し上げる。
- 思い起こせば、航空部が開催した最初の一大イベントであった50周年記念事業の時、このお二人は主将と主務であった。この倣いでゆくと、25年先の100周年の中心となって活躍するのは、現役部員の諸君ということになる。その頃の航空部はどのような発展を遂げているのであろう？ 全国大会の常勝校となっているのだろうか？ 専用滑空場を持っているのだろうか？ 見たいと思うが、残念ながらその頃私はこの世には居ないだろう、多分、きっと。
- 実行委員長が掲げた事業のコンセプトは、「温故知新」であった。周年を機に、先輩達が連綿と繋いだ75年の歴史を尋ね、そこから将来に向かつての道標みちしるべを探すという意図であった。私達は現在を生きる部員と、まだ見ぬ部員に「何か」を伝えることが出来たであろうか？ 部員たちは、確かに「何か」を受け取ったと感ずることが出来たであろうか？ 文字や形や言葉では表せないもっと大切な「何か」を。
- とりあえず、100周年に向かつて大いなる夢を描き、語ろう。語られる夢は実現するが、語られぬ夢は永遠に夢でしかない。
- — 古い酒は新しい革袋に — 引継がれた。翔友会は久保雅史新会長体制のスタートである。創部50周年を機に音信の途絶えていた方々を掘起こし、遠隔地の方とも連絡を取り直し、OBを再結束させて、それまでの関西を中心としていた「航空部OB会」を全国ネットの「翔友会」と名称を改めて四半世紀、その中核を支えた年代が、あるいは鬼籍に入り、あるいは会費免除の70歳代となった。その穴を埋めるべき30歳以下の世代に参加意識が乏しい。まるで、現在の日本人社会の縮図を見るようだ。若い翔友各位に告ぐ、君達が現役のころ、OBが支援してくれたように、今度は君達が後輩を支援する番である。節目の大きな宴が終わった今、若い世代が気持ちも新たに新体制を支えてゆかないと、翔友会の伝統の灯が先細りになりはしないかと危惧する。
- 昨年の全国大会は、竹山翔太君という優勝に絡めるエースを擁しながら、東北大震災によって、大会中に続行中止となり、今年もASW28-18という新鋭機を駆って、満を持して臨んだにも拘わらず、期間中全日を通しての天候不良により競技不成立という、2年連続の「ツキの無さ」に泣いた。今年こそ…。記念式典での総長、学長、来賓のご期待もある。
- 記念式典・祝賀会を誌上に再現して「特集」とした。出席が叶わなかった翔友に少しでもその雰囲気を感じたことと、記録に残すことで、次回の周年事業を推進する委員の参考になれば、本誌の役割も果たせると考えて。皆さんご健勝にて。